感染症専門医として
やりがいと責任を持って

国立国際医療センター
エイズ治療・研究開発センター センター長
岡 慎一 おか しんいち

私は、昭和57年に徳島大学医学部卒業後大学を離れて25年目になります。現在は、エイズを中心とした感染症を専門とする医師および医学研究者です。国立国際医療センターは、厚生労働省直下のNational Centerであり、国の政策に基づいた医療を遂行する医療機関です。このため、スタッフ・設備・研究費など一般病院では考えられないほど配備されており恵まれた環境ですが、また一方その責務の重大さには、身が引き締まる思いです。

1 エイズ治療・研究開発センター [AIDS Clinical Center; ACC]

ACCは、専門外来、専門病棟、エイズ医療情報室、治療研究開発室（研究室）の4部門からなり、医師21名（常勤医11名）を始めとしてリサーチレジデントやHIV専門看護師（コーディネーターNS）のほか、看護部所属の看護師を含め総勢約70名からなる組織です。研究室では、医師以外の若手研究者もHIV研究に取り組んでいます。今年は開設10年目で、これまでのHIV／AIDS患者数は、まもなく延べ2000名になろうとしており、その患者数は国内最多です。しかしながら、当科に受診して来た患者だけを診ていればいいというわけではなく、全国の医療機関に対するHIV診療普及のための研修活動、HIVの病態解明や新しい治療法開発のための臨床研究、感染症を専門とする若手医師の育成などを行っております。また、海外医療機関との共同研究も積極的に行っており、米国NIHを中心とした多施設共同臨床試験への参加（米国NIHが共同臨床試験施設として正式に認定したのは、日本では全医療部門でACCが初めて）をはじめ、エイズが蔓延するアジアやアフリカとの共同研究なども行っております。

2 感染症専門医となるきっかけ

私は、卒後研修を浜松医大で行った後（この時は腎臓内科）、レジデントとして東京都老人医療センターに赴任、このとき出会った島田馨先生（その後、東大医科研教授、附属病院長を経て退官）を師と仰ぎ感染症を専門とするようになりました。私自身は、老人医療センターでの安月給のレジデント時代に、全国の大学から集まった多くの同僚や先輩たちの医学に対する情熱から多くのものを学びました。また、東大医科研時代には病気を理解する上での基礎研究の重要性や世界標準とは何かを学びました。ACCも、学閥不問で意欲溢れる若手を中心とした活気ある職場です。将来感染症専門医になりたいと考えている方、厳しい環境（安月給？）で自分を磨きたいと考えている方、卒後10年は自己投資と考え、ぜひACCで切磋琢磨してみてください。

略歴　1957年岡山県倉敷市生まれ
医学博士
エイズ学会理事、感染症学会評議員
専門：HIV感染症の臨床
趣味：磯釣り、おいしい魚を食べること、クラッシック音楽鑑賞

1982年　徳島大学医学部卒業
1987年　東京大学医科学研究所感染免疫内科助手
1988年　米国NIH／NIAID客員研究員
1989年　東京大学医科学研究所感染症研究部助手
1995年　東京大学医科学研究所 同 助教授
1997年　国立国際医療センターエイズ治療研究開発センター部長
2005年　熊本大学エイズ学研究センター客員教授併任
2006年　4月～現在に至る